参考

・「今はもうないものの光――川上弘美「神様」」　堀江敏幸（「文学界」〈文学界図書館〉平十・十二）

作者が目を凝らし、時には息をつめ、それでいて外からは肩の力をきれいに抜いているようにしか見えない巧みな呼吸をつむぎながら描き出すのは、当たり前のように遭遇した《存在》との精髄だけの恋なのであり、多少大袈裟にいえば、刹那的にしかありえない命の手触りである。／事実上の処女作として認知された表題作をふくむ短篇集『神様』に収められた九つの作品は、一様に接触と離反を主題としつつ、電子の冷たさをじんわりと人肌の温もりに変えるような不思議な熱を帯びている。ここにはあからさまな恋の台詞も性愛の場面もない。まさしく神様のみに許された高雅な差配があって、登場人物たちはみな、その透明な指図を素直に実践しているだけのようなのだ。強い気持ちで相手を所有しようとしないから、彼らは至近距離まで心が通っても最終的な合一など願いはしないし、離別に際しても自分を見失って泣き崩れたりしない。(…)ふわふわとして同時にどっしりとした存在感を彼（注・「神様」のくま）は持ち合わせているからだ。異界的とも呼びうる状況設定なのに、もってまわった口実作りなど抜きにして、なにかが突然《わたし》の日常に降り立ち、ひどく近しい《存在》となって呼吸を開始する。(…)／透明で重みのない幽霊を支えているのが、相合い傘や空豆といった具体的な媒介物であることも指摘しておいていいだろう。おなじマンションの部屋の真上に住んでいる、画家兼高校教師の独身男性エノモトさんとの、なんら疚しいところのない、淡白だがひどくうららかなつきあいを描く「離さない」での仲介項は美味しい珈琲であり、エノモトさんが南の海で拾ってきた人魚である。この小さなマーメイドをエノモトさんが浴槽で飼うようになってから、二人の関係にはかすかな波紋が生じはじめるのだが、人間界では薄倖を義務づけられているささやかな《存在》を介して、ふたりはようやく互いの気持ちを無意識に伝えあう。もちろん、伝えるばかりで成就しないところにこの作品の魅力はあるので、エノモトさんは人魚だけでなく語り手に魅入られて離れられなくなるのを懼れでもするかのように、貴重な異人を結局海に返してしまうことになる。「ずっと離さないでいるだけの強さがぼくにはなかったのかな」という彼の言葉は、しかし「強さがなかった」と認識する自然体の強さに、彼自身が、そして語り手がまだ半分しか気付いていないことを示しているだろう。すんなりと神様のご加護を引き出すためには、いまどき稀有な、押しの弱さの美質に対する無自覚が必要とされるのだから。／離す、離さないの関係図式は、ほかにも見出すことができる。「夏休み」と題された短篇の舞台は収穫期の梨園で、ここには毎年、奇妙な白い小動物が出現する。アルバイトをしていた語り手は、そのうちの一匹に接近するのだが、ひたすら梨を食べつづけたあげく季節の終わりとともに梨の木のこぶとなって消滅する《存在》たちは、じつのところ、ウテナさんにいきなり恋愛相談を持ちかけた河童や（「河童玉」）、そのウテナさんが日曜日の青空市で買って来た壺に住む、コスミスミコという、情痴沙汰で殺されて往生しきれずそこに暮らしているらしいコロボック

ル風の女性や（「クリスマス」）、夫の浮気が原因で母親がニンゲンフシンに陥っていると報告にくる、おなじマンションのえび男くん（「星の光は昔の光」）と同類なのである。えび男くんがしばしばのニンゲンフシンから立ち直ったときに口にする《星の光》の比喩は、本書（注・『神様』）に集約された新しい意思疎通のありようを代弁しているばかりか、川上弘美の小説に分有された、向こう側とのかすかな交感の秘密をも証しだてて、強い印象を残す。星の光は死んだ光だ、と少年は言うのだ。「昔の光はあったかいけど、今はもうないものの光でしょ。いくら昔の光が届いてもその光は終わった光なんだ」と。語り手を取り巻く名状しがたい《存在》たちを射し貫いているのは、この《今はもうないものの光》なのである。／ひたすらな受容に身を投じている彼らの内面でも、《わたし》の胸のうちでもない、彼らと《わたし》が触れあう時空の切なさをみごとに捉えた『神様』の連作の末尾を飾るのは、ふたたびくまを主人公とした物語（「草上の食卓」）である。郷里に帰る決心を固めたくまは、別れのピクニックに《わたし》を誘い、途中で雷雨に襲われると、落雷の危険がある傘を投げ出して、《わたし》を抱えるように地面にしゃがみ込む。そのとき身体いっぱいに拡がるくまの《温かみとしめりけ》は、いつ消えてしまってもおかしくない《存在》との、かすかだが確実な接点だ。「春立つ」に登場する飲み屋の女将、カナエさんの言葉を借りるなら、「雪が溶けるころにいなくなっちゃう、そういう存在のもの」を愛するために、作者は日々、くまの神様に祈りを捧げているのではないだろうか。